

# 地図史における森幸安の再布置

上 杉 和 央

- I. 森幸安研究の進展と課題
- II. 日本図と経緯線
  - (1) 赤水日本図の作製
  - (2) 長久保赤水資料「橘守国図」をめぐる
- III. 幸安作製の日本図
  - (1) 幸安の地図作製
  - (2) 「日本志」構想の展開
  - (3) 幸安にとっての「日本分野図」
- IV. 日本の地図史における幸安の位置づけ

## I. 森幸安研究の進展と課題

小稿の目的は、森幸安（1701-没年不詳：以下、幸安と表記）の事績を地図史の中で改めて検討することである。

1990年代までの幸安の評価を端的に表現しているのは、矢守の「ナゾのカルトグラファー」という言葉であろう<sup>1)</sup>。地図作製者であること以外「ナゾ」に包まれた存在、という位置づけであり、地図史の中でも特異な位置づけにおかれざるを得ない状況であった<sup>2)</sup>。

このような状況に変化が見られたのは、辻垣・森による成果が刊行された2000年代以降のことである<sup>3)</sup>。辻垣らは、それまでに知られていた幸安作製の地図を網羅的に調査するのみならず、新たな所蔵先も発見した。そして地図の識語をもとに幸安の人物像や地図作製に対する幸安の思想を論じた。辻垣はその後も調査を行い、国立国会図書館などで新た

な地図資料を発見している<sup>4)</sup>。

また、筆者はこれまでに全く取り上げられることのなかった幸安作成の地誌資料を分析し、幸安の地誌作成者（トポグラファー）としての側面を論じた<sup>5)</sup>。さらに残された資料から幸安の地誌と地図のとらえ方を検討し、幸安は最終的に「図書」、すなわち「図」（地図）と「書」（「志」＝地誌）からなる「日本志」という作品を構想するにいたったこと、そして残存資料から見る限り、その構想は完成していたであろうことを論じた<sup>6)</sup>。そして、18世紀の大坂における知識人ネットワークを論じる中で幸安の交友関係の一端を明らかにし、幸安が孤立した存在であったわけではないことを確認した<sup>7)</sup>。

これらの研究の蓄積により、幸安の「ナゾ」は次第に解明されてきた。もちろん、幸安の検討を進めることは引き続きの課題ではあるが、これまでに明らかになった新たな幸安像をふまえた上で、地図史における幸安の位置づけについて検討することが、もう1つの課題として浮かび上がっているように思われる。すなわち、幸安個人ないし幸安作製図という限定的な検討にとどまるのではなく、地図史というより広い視野からの検討である。この点について、小稿では幸安の作製した日本図に着目しつつ、検討することにした。

日本図に着目するのは、幸安の作製した日本図に経緯線<sup>8)</sup>が記載されており、それが長

キーワード：森幸安，長久保赤水，経緯線，地図史

久保赤水（1717-1801：以下、赤水と表記）の刊行した地図よりも時期が早いことが、早くから注目されてきたからである。この点は、地理学や地図史を学ぶ者の間では周知のことであり、ことさら強調する必要はないだろう。小稿との関係で重要なのは、海野が指摘した、赤水が日本図を作製するにあたり、幸安の作品に触れていたという点である<sup>9)</sup>。ただし、海野は日本図に関する総論の中で触れるにとどまり、具体的な議論を展開しなかった。そのため、地図史研究全体のなかでも、両図の関係については概略的にしか理解されていない。この点をより明確にすることが、幸安の地図史における位置づけを再検討することにもつながると思われる。

以下、Ⅱ章では、幸安作製の日本図と赤水日本図との関係を明確にする作業を行い、Ⅲ章では、幸安の「日本志」構想における日本図の位置づけを確認する。Ⅳ章では、この2つの作業を見通すことで導き出される幸安の地図史における位置づけを論じる。

## Ⅱ. 日本図と経緯線

### (1) 赤水日本図の作製

赤水は安永8年（1779）に『改正日本輿地路程全図』（図1）を刊行した。赤水日本図と総称されるこの図は、幕末までに少なくとも5回の改版が確認され<sup>10)</sup>、さらに類版や海

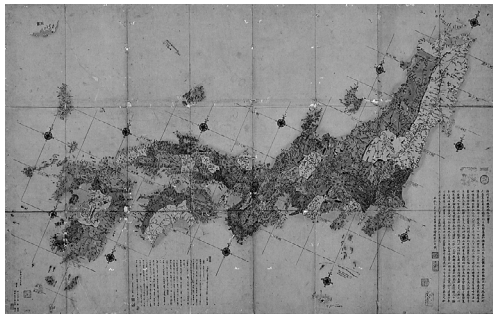


図1 『改正日本輿地路程全図』

長久保赤水作、浅野弥兵衛版、安永8年（1779）  
京都大学附属図書館蔵

賊版も多数知られており、江戸時代後期を代表する日本図として位置づけられている<sup>11)</sup>。経緯線が記載された初めての出版日本図としても名高い<sup>12)</sup>。

この図には儒者柴野栗山（1736-1807）による序文が付されている。それによれば、赤水は20年余りに渡る自らの見聞や文献調査、そして旅人や知人から得る情報をもとに、日本図を完成させていったという。

そのような日本図作製の過程で収集、活用されたと思われる資料の一部が長久保赤水資料の中に残されている。これらの資料は、現在は茨城県高萩市の文化財指定を受けて保存されている<sup>13)</sup>。これらの中には、いくつかの興味深い資料があるが、なかでも『改正日本輿地路程全図』の原図と考えられているのが、明和5年（1768）の年号を持つ「改製扶桑分里図」（図2）と題された赤水自筆の日本図である<sup>14)</sup>。一見して分かるように、この図には地形や地名などの多くに胡粉による修正痕がある。様々な情報を得るなかで日本のかたちや地名を検討していった幸安の思索過程が刻まれていると言ってもよい。

この図をめぐって、海野は次のような興味深い指摘をしている。「赤水の『改製扶桑分里図』は森幸安の『日本分野図』を基図としていくらか改訂をくわえたものに過ぎず、日本列島の図形にも大差はない」<sup>15)</sup>。ここにあ



図2 「改製扶桑分里図」

長久保赤水作、明和5年（1768）  
高萩市歴史民俗資料館蔵（寄託資料）

る「日本分野図」とは、現在国立公文書館に所蔵されている「日本志輿地部 日本分野図」（以下、「日本分野図」と表記）を指す（図3）。海野のこの指摘によれば、「改製扶桑分里図」は「日本分野図」との図形的な差はほとんどないということになるが、先にも触れたように、「改製扶桑分里図」は赤水自体の修正が大幅になされており、海野のように即断することは筆者にはためらわれる。実際に両者の図形を比べてみても、一致する部分がないわけではないが、海岸線の表現には違いも多く、「大差はない」と断言することは難しい。「改正扶桑分里図」の作製の際に「日本分野図」を参考としたという海野の指摘それ自体については、筆者も同意するが、その関係性はより慎重に論じる必要があるだろう。

また、海野は『改正日本輿地路程全図』と「日本分野図」とも比較している<sup>16)</sup>。そこでは、『改正日本輿地路程全図』の経緯線の記入が「日本分野図」の影響であることを述べ、「図形その他についてみても、要するに赤水図

は幸安図を増補改訂したものにすぎない<sup>17)</sup>と結論づけている。幸安の地図史における位置づけを検討したい筆者にとって、この海野の結論は力強いものではあるが、赤水日本図の意義を矮小化しすぎており、同意しえない。たとえば、室賀が赤水の「二〇年の苦心」を「記載内容の厳正詳確を期した点<sup>18)</sup>」に求めている点、また海野の議論を受ける形で矢守が「しかし栗山の序文にいうように…（中略）…編纂の努力が重ねられたのもまた事実<sup>19)</sup>」と指摘している点もまた、十分に斟酌されるべきであろう。

## (2) 長久保赤水資料「橘守国図」をめぐって

長久保赤水資料のなかに「橘守国図」という日本図がある（図4）。この図は裏書に「橘守国図」と表記される以外、模写の経緯などを示す史資料などは発見されていない。筆跡は赤水のものだという<sup>20)</sup>。橘守国（1679-1748）は大坂で活躍した浮世絵師であり、『唐土訓蒙図彙』（1719刊）の挿絵担当として知られる。

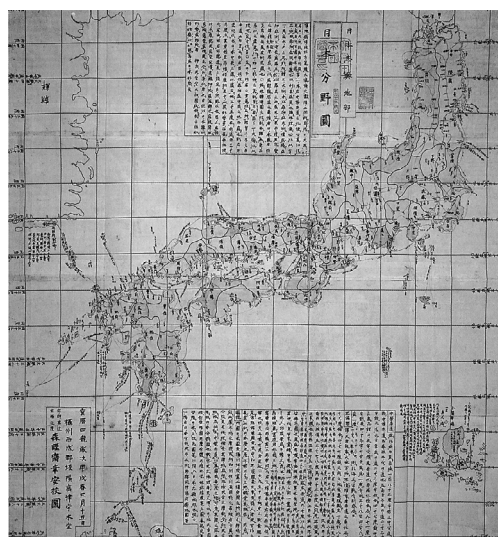


図3 「日本志輿地部 日本分野図」

森幸安作、宝暦4年（1754）  
独立行政法人国立公文書館蔵

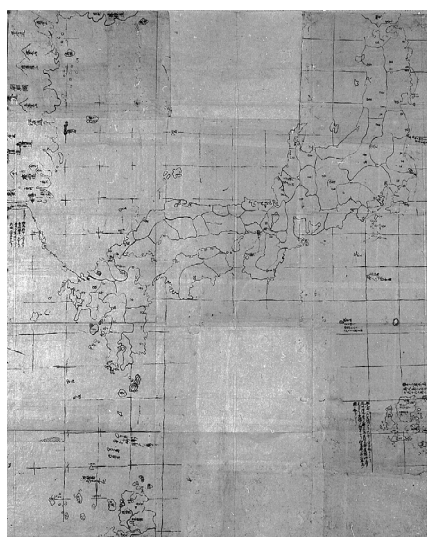


図4 「橘守国図」

長久保赤水模写、作製年不明  
高萩市歴史民俗資料館蔵（寄託資料）



実は、この図こそ、海野らによって「森幸安の日本分野図の模写」<sup>20)</sup>として紹介された図に他ならない。しかし、海野らはその中で資料名を明示しておらず、それ以上議論を進展させることもなかった。また、長久保によるトレース略図を伴う資料紹介もなされているが<sup>22)</sup>、「日本分野図」との関係についてはまったく触れていない。そのため、これまで本図についての理解が一般に広まることはなかったのである。そこで、ここでは「橘守国図」について、改めて検討を加えることにしたい。

まず、確認せねばならないのは、この図が本当に「日本分野図」の模写図であるかどうかという点である。これに関して、「日本分野図」に記される幸安の識語に、次のような注目すべき記述がある。

図する所の日本の図は、摂州坂府の画工、橘守国の貯ふる所、尤も鮮明なり。然るに、この図を関するに、土地の広狭、あるいは和州信州などの如き図形の長短、小異あり。故に今その地の理を校定、その図形を條全、かつ地球天合の度数を線し、天文極を距むこと、及び中帯の赤道を相去ることを知らしむ。図面に度ごとの線を置くをもって、その国の風土を考ふべし。号けて日本分野の図と曰ふ。

これに従えば、「日本分野図」の原図は橘守国が所蔵していた鮮明な日本図であった。しかし、土地の広狭・長短に不備もあるので、修正を施し、さらに度数を記す線を書き加えて完成させたのが「日本分野図」であるという。よって、大和国や信濃国の形状、そして経緯線の有無という点で、橘守国所蔵の原図と「日本分野図」とは明確に区別できることになる。

この点をふまえて赤水が模写・所持した「橘守国図」を見ると、経緯線が確認でき、大和国、信濃国の形状も「日本分野図」に酷

似している。全体の海岸線についても類似しており、「橘守国図」が橘守国所蔵の図ではなく、幸安作製の「日本分野図」を直接の原図として成立していることは疑いない。ただし、赤水が「日本分野図」それ自体から模写を作製したのか、それとも第三者が模写をしていた図から、さらに模写するかたちで作製したのかについては、明らかにしえない。

「橘守国図」という名称で残されているのは、「日本分野図」の精密な模写ではなかったことに起因するのだと思われる。「橘守国図」は幸安が重視した「書」（ないし「志」）の情報を完全に捨象し、その部分を空白にする形で模写している。そのため、「元は橘守国の図であった」という情報のみが誤った形で伝わったのであろう。

「書」の捨象のほかにも、「橘守国図」は「日本分野図」と異なる点がいくつかある。その1つが地図内の地名や文字注記の省略である。「日本分野図」は、城下町および主要な宿場・湊が表現され、陸上・海上の交通路が記されている。それに対して「橘守国図」は基本的に城下町のみが記され、その他の情報は失われている。しかも、模写されていない城下町もかなりある。

また、国境線や海岸線についても、詳細に見れば、厳密に模写したとは言えない状況をいくつも確認することができる。たとえば、陸奥国下北半島の北部の一部は、「日本分野図」で航路として記載された情報が海岸線として認識されて模写されている。また、瀬戸内海の島々はほとんどが模写されておらず、山陽道各国の海岸線は非常に単調なものに変えられている。さらに「橘守国図」には伊勢・尾張・美濃・三河、出雲・伯耆、播磨・美作・備前の間の国境線が描かれないうまとなっている。

さらに、「日本分野図」の経緯線は直線で記されているのに対し、「橘守国図」では定規等は使用されず、いくつかのあたりをつけ

てそれらを筆で結んでいくという、ごく簡単な方法で記されている。また、海岸線との交点部分についても、「日本分野図」とおおよそは合っているといた程度であり、厳密さはまったく求められていない。

このような粗雑さが目立つ一方で、追加されている情報もある。特に顕著なのが朝鮮半島の地名の追加と、琉球部分の追加である。そのうち、琉球について見ておくと、「日本分野図」には沖縄本島の北端だけが表現され、注記も「琉球国」のみであるが、「橘守国図」は、緯度一度分程度南方に広がっており、沖縄本島がより広く表現される。注記も「首里」や「舜天宮」、「中山王」など複数となる。ただし、「首里」が島の北端近くに記載されるなど、その精度はかなり粗い。

琉球、および朝鮮半島の地名や地形についての情報をどこから入手したのかについては不明であるが、「日本分野図」のみならず複数の資料が用いられていることが分かる。ただ、その粗雑さから見れば、赤水が複数の資料を比較検討しながら厳密に作製したというものではない。

このように見てくると、先述した海野の議論にはやはり若干の修正が必要であることが分かる。赤水の手元にあったのは、「日本分野図」の粗略な模写図なのであって、赤水が日本図の作製にあたってそれを参考にしたことは間違いないとしても、赤水日本図が「日本分野図」と大差ないであるとか、その増補改訂に過ぎないといった断言を強力に下支えするほどの精度を備えたものではないのである。

改めて確認すると、赤水は幸安の「日本分野図」もしくはそれを基にした図から「橘守国図」という名称の模写図を作製した。赤水の経緯線描画の発想には幸安の図が確かに影響を与えているのであり、この点において、日本地図史における幸安の果たした役割は高く評価されてよい。ただし、海野が論じるほ

ど、赤水が「日本分野図」に大きく依拠しているかと言えば、決してそうではない。室賀や矢守が指摘しているように、多くの資料の間を逍遙する中で仕上げていく過程に、赤水の独自性を見出しうるであろう。

赤水が参照した資料の中に、幸安が作製した別の図が含まれていた可能性についても触れておきたい。川合英夫は幸安作製の「日本志東海部 伊豆国属島地図」（国立公文書館蔵、以下「伊豆国属島地図」）に黒潮に関する注記が見られること、そしてその注記が赤水日本図にも踏襲されていることを論じている<sup>23)</sup>。川合によれば、幸安は「黒瀬川」として地図に初めて黒潮を描いた人物であるという。注記表現が似ている点からして、赤水がこの図（もしくはその系統図）も何らかの形で参考にする機会があった可能性があるだろう。

ただし、その際も完全に依拠したわけではない。赤水は幸安の注記に「クロシホ」という表現を付け加えた。同じく川合によれば、これは黒潮という名称表現の最古の例になるという。もちろん、常陸国の庄屋であった赤水が太平洋の黒潮についての知識を生活経験の中で得ていたとは考えにくく、何らかの資料に基づいて表現したのだと思われるため、今後、さらに古い資料が見つかる可能性は高い。ただ、この事例も、経緯線の事例と並んで、資料を博捜する赤水の姿勢を示すものと言えるだろう。

幸安に話を戻せば、これら2つの事例は、出版されることになかった幸安の地図が18世紀後半の一部の知識人に一定の影響を与えていたことを明瞭に示すものである。幸安が大坂の知識人たちと交流を持っていたことは、既に指摘されている<sup>24)</sup>。幸安の活動時期が宝暦11年(1761)までしか確認されていないこと、一方の赤水の大坂訪問は明和4年(1767)、および安永3～4年(1774～1775)であることを考えれば、幸安と赤水が直接交流した可能

性は低い。しかし、赤水は大坂の版元、浅野弥兵衛から日本図や世界図を刊行しており、大坂には縁があった。そして、当時の大坂で最も著名な知識人の一人である木村兼葎堂(1736-1802)を始め、大坂ないし畿内の知識人たちと交流をもっていた<sup>25)</sup>。このようなネットワークを通じて、大坂の知識人たちのもとにあった地図を参照することは可能な立場にあった。特に木村兼葎堂は地図の収集をしていたことが知られており、幸安とも地図の貸借を行っている<sup>26)</sup>。また、幸安は「伊豆国属島地図」を2枚作り、その1枚を同じく地図収集で知られた大阪天満宮司渡辺吉賢(1703-没年不詳)に贈っているが<sup>27)</sup>、吉賢と兼葎堂とは家族ぐるみの付き合いであり、両者の間にも地図貸借が知られている<sup>28)</sup>。このような知識人ネットワークを考えれば、赤水が幸安の地図にたどりつくのは、意外に容易なことだったのかもしれない。

### Ⅲ. 幸安作製の日本図

#### (1) 幸安の地図作製

辻垣らによる全国各地の調査により、近年、幸安の作製した地図が各地で発見された<sup>29)</sup>。これに加えて、筆者も辻垣らが指摘していない自筆図6種7枚を、京都大学総合博物館収蔵品のなかに確認した(表1)。これらはすべて山陰道に関する地図であり、「美作国地図」が幸安の地図作製の中では初期に属す作品、それ以外は地図作製を最も活発に行っ

いた時期の作品である。

これらを加えると、現時点で明らかになっている自筆作品は地図440点、地誌17点の計457点となる(表2)。幸安の地図は特徴的な筆致で文字が記され、しかも同一の筆跡である。そのため、工房内での集団作業での作製ではなく、基本的には幸安個人による作製であると考えてよい。このことをふまえれば、440点という点数自体、日本地図史上、特筆すべき数値と言える。なお、幸安には弟子として沢田呂少が知られている<sup>30)</sup>。呂少は1300枚余りもの地図を描いたという記録があり<sup>31)</sup>、これだけを見れば、幸安よりも多い。ただし、呂少の作品として現存が確認されているのはわずかに過ぎず、数値の真偽を判断することはできない。

辻垣らが指摘しているように<sup>32)</sup>、幸安が作製した地図は天体図から世界図、アジア図といった広域図から、都市図や寺社境内図などの狭域図に至るまで実に多様であり、さらには過去の地理を描いた推定・考証図もいくつか作られている<sup>33)</sup>。このうち、日本図は9点が知られている(表3)。

#### (2) 「日本志」構想の展開

幸安の「日本志」構想について、前稿では予察的に論じた<sup>34)</sup>。ここでは本稿の内容に沿いつつ、より具体的に検討し、その理解を深めることにしたい。

そもそも日本志は「日東輿地の書」、すな

表1 京都大学総合博物館収蔵森幸安自筆地図一覧

名称	数	作製	サイズ	登録番号
美作国地図	1	寛延2年(1749)	51×77	Vリ-5
日本志山陰部 隠岐国地図	1	宝暦2年(1752)	79×135	Vリ-15
日本志山陽部 備前国地図	1	宝暦2年	160×155	Vリ-1
日本志山陽部 備中国	2 (分割)	宝暦2年	160×95 160×96	Vリ-2
日本志山陰部 伯耆国地図	1	宝暦4年(1754)	76×116	Vリ-10
日本志山陰部 因幡国地図	1	宝暦4年	77×115	Vリ-7

表2 森幸安関連資料の所蔵機関・枚数一覧

	所蔵館	総数	自筆確定数	
地図	国立公文書館	222	222	
	北野天満宮	124	114	
	国立国会図書館	85	76	
	函館市中央図書館	7	7	
	京都大学総合博物館	11	7	
	東京大学史料編纂所	11	4	
	神戸市立博物館	58	3	
	京都市歴史資料館	6	3	
	大阪歴史博物館	2	2	
	高津古文化会館	2	2	
	金刀比羅宮図書館	117	0	
	京都大学附属図書館	29	0	
	地誌	大阪中之島図書館	12	12
		国立国会図書館	5	5
	計	691	457	

辻垣・森 (2003), 辻垣 (2006), および筆者の調査による。ただし、明らかに近代以降と思われる模写図は含めていない。

表3 森幸安作製の日本図

地図名 (内題)	作製	原図	サイズ	所蔵番号
日本志輿地部 分国之図 城堡附	寛延4年 (1751)	並河誠所蔵小図	51.5×57.5	217
日本志輿地部 日本水土図	宝暦4年 (1754)	並河誠所蔵大図	102.7×115.4	221
日本志輿地部 日本分野図	宝暦4年	橘守国蔵日本図	102.0×94.7	220
三大界 五大洲 亜細亜大洲之属嶋 日本志輿地ノ部 日本分形図	宝暦4年	(並河誠所蔵小図か)	51.2×38.4	214
日本志輿地部 日本地度図	宝暦4年	(並河誠所蔵小図)	51.4×39.5	216
日本地体図	宝暦5年 (1755)	並河誠所蔵大図	127.7×115.0	222
日本尚古図	宝暦5年	並河誠所蔵小図	53.6×57.0	215
日本津湊図	宝暦5年	(不分明)	67.8×57.5	219
日本分土図	宝暦5年	並河誠所蔵小図	51.3×76.5	218

すべて国立公文書館所蔵

「原図」欄のうち、森幸安が原図を明示していないものについては、地形表現から判断して( )に入れて記した。

わち地誌書として構想されていたが、寛延2年(1749)の段階で「日東の半ば著さず」という状況であった<sup>35)</sup>。そしてこの時期、幸安は「編輯為す所の畿内五州部、各々地図を作」<sup>36)</sup>

ろうとしている。実際、現存する幸安作製地図のうち、寛延2～3年作製の約20枚は、1枚を除くとすべて畿内に関するものである。残る1枚は先述した京都大学総合博物館収蔵



「美作国地図」だが、この図は版行図に幸安が直接識語を付け加えたものであり、図自体は幸安が描いたものではない。

このような状況に大きな変化が見られたのが寛延4年である。この年の正月5日に校された「日本志輿地部 天文之図」（国立公文書館蔵、以下「天文之図」と表記）には次のようにある。

天学地学同一にして異なることなし。しかるに天は仰ぎ観るをもって恐れていまだ著さず…（中略）…予が著する所の数百幅の地図に上冠せしむるものなり

この文章で、幸安は「天文之図」を初めて作製したこと、そして、「天文之図」をこれまで描いてきた地図に「上冠」するものとして位置づけることを述べている。前年までの畿内を中心とした地図作製とは異なる方向性の活動ではあるが、幸安はそれらを一体的にとらえていることに注意したい。

同月中旬に作った「日本志輿地部 地球天合線度図」（国立公文書館蔵：以下「地球天合線度図」と表記）（図5）によれば、そのような地図群を幸安は「日本輿地図目」と呼んでいた。そして、その第一が天文図であり、次には世界における日本の位置を示す識語「日本志輿地部 渾地図識」（国立公文書館蔵）、日本の極度や時候、日月の運行、運氣



図5 「日本志輿地部 地球天合線度図」

森幸安作、寛延4年(1751)  
独立行政法人国立公文書館

国勢を知るための世界図「大地円球天合 三大界五大洲万国図」（国立公文書館蔵）が続く、その後中国・朝鮮・琉球と日本の位置関係を知るための本図が並ぶと明示されている<sup>37)</sup>。

東アジアが表現される「地球天合線度図」の次に位置づけられたのが日本図、畿内地図、七道諸国地図である。このうち日本図・畿内地図はすでに作製されており、七道諸国地図数百幅はこれから著すと述べている。その上で、幸安は次のように述べている。

これら皆、編集する所の日本志の書策と併合して見る寸ば、則ち日本の事現然たるものか

このように、幸安にとって第一の射程は日本であった。そのような構想の冒頭に、天文図・世界図・東アジア図が置かれ、日本の位置が確認された後、日本図、五畿七道の各国図へと細分していく。このような空間理解は寛延4年以降になって現れた新たな視角であり、それは幸安の地理思想にとって新たな展開でもあった。

さて、「地球天合線度図」の識語のなかで、日本図は六十余州の疆域・郡県・国勢・国風を知るための「日本分界図」なる図、そして山川や村・駅などを知る「日本輿地図」が挙げられている。これらの名称そのままの図は残されていない。しかし、この年、幸安は並河誠所が所持していた大小二図の「日本輿地図」を、渡辺吉賢を通じて手に入れていた<sup>38)</sup>。その原本は残されていないが、小図を基にした「日本志輿地部 分国図」（国立公文書館蔵）は、吉賢から原図を寛延4年8月に借り受けて10月に完成しており、「日本分土図」（国立公文書館蔵）もその下図が同年11月に写されている。図の内容も一致する点をふまえても、これらの図のいずれかが「日本分界図」に当てはまると判断できる。

一方、大図を基にした図としては「日本地球図」（国立公文書館蔵）があり、識語によ



れば、その下図は「日本輿地図」という名称で寛延4年7月に校合が終わっている<sup>39)</sup>。すなわち、この下図が上記の「地球天合線度図」に記された「日本輿地図」に当てはまるとしてよいだろう<sup>40)</sup>。

いずれにしても、並河誠所が所持していた図を手に入れることができたことが幸安の日本志構想にとって重要であったことは疑いない。そして、その大きな要因は、渡辺吉賢の地図を利用することが可能となったことであつた。両者の関係は前稿で指摘済みであるが、ここでその指摘を若干、修正しておきたい。前稿では、吉賢から借り受けた地図の作製時期より、両者が出会つたのは寛延4年以降と想定しておいた。しかし、寛延4年正月月中旬に作製された「地球天合線度図」のなかで「日本輿地図」が触れられていることを考えれば、それ以前に出会つていたと理解するべきだろう。この修正により、吉賢との出会いが幸安の地理思想の展開に大きな影響を与えたという可能性が、前稿の指摘よりもさらに高まつたことを確認しておきたい。

### (3) 幸安にとっての「日本分野図」

寛延4年の後、再び幸安が日本図を作製するのが宝暦4年(1754)である。「日本志輿地部分国之図」を除き、寛延4年に入手・作製した図も宝暦4・5年に校合し直しており、この時期に日本図を整備しようという意図があつたことは疑いない。寛延4年から宝暦4年までの間の幸安の地図作製を見ると、各国図を精力的に作製しており、宝暦4年春までには、作製年代が不明な四国・九州の一部、および陸奥国をのぞけば、すべての国の図を一通り作製し終わつていた。すなわち、宝暦4年は「地球天合線度図」で語つた構想がおおよそ実現しようとしていた時期であつたことになる。構想をし始めた頃の地図を修正しつつ、不足するピースを補い、最終的な整備を進めるようになったなかで日本図にも改め

て意識が向けられた、と考えてよいだろう。

この際、新たに追加された日本図の1つが「日本分野図」であつた。「日本分野図」には次のような文章が記されている。

天文地理のことは、「天文」、「渾地」、「大地天合円球」、「針盤」、「渾円天度合体」、「天線地方」、「地球線度」などの図に悉く見ゆ。これら皆日本のことを預るの故に、まず図著す。もつて俱に日本志輿地部に入れるなり。これより以降、「日本分形」、「同水土」、「同郷駅」、「同津湊」、「同輿地」の図などあり。

(カギカッコは筆者が補筆)

「天文」とは先の「天文之図」を指しており、以下も現存する幸安自筆図と対応させることが可能である。そして、ここでは天文や世界は「日本のことを預る」、すなわち日本の理解に関わつているものであるために、「日本志輿地部」の冒頭に置くのだ、という幸安の意図が再表明されている。ここからは、地図の増加が見られるものの、基本的な視角は寛延4年時点と変化していないことが確認できる。その後、日本図が配置されると説明している点も同様である。そして、列挙されてある図名を見ても分かるように、「日本志」に複数枚ある日本図は、それぞれが1つのテーマをもつた主題図として作製されているのであり、多様な側面から日本を照射する装置として機能していることが分かる。

このように見てくれば、幸安は「日本分野図」を独立した1枚として作製したわけではなく、あくまでも「日本志」という壮大な構想の一部として作製したことが浮かび上がってくる。内題が「日本志輿地部 日本分野図」であることもこのことを示しており、「日本分野図」一枚だけを取り上げて議論したとしても、それは幸安の意図を十分にくみ取つたことにはならない、ということになる。

そのような全体構想の中での「日本分野

図」であることをふまえた上で、この図の果たす役割は、次のように位置づけられていた。

図面に度ごとの線を置くをもって、その国の風土を考ふべし

すなわち、度の違いによる国内の「風土」の違いを知るための図として作製されたのがこの図である。同じく識語の中には、赤道から23度までを「暖帯」、27・28度から42・43度の間を「正帯」、60度以上を「寒帯」と呼ぶこと、そして暖帯・寒帯よりも中和な正帯に生まれる方が「大いなる幸い」であることが語られる。そして、

その上、日本・唐土のごとき正帯正気の地に産すること、誠幸の甚きなり。持に天恩を忝ふせん

とまとめられている。

幸安作製の日本図の中には、経緯線が記された図がもう1枚ある。「日本志輿地部 日本地図図」（国立公文書館蔵）がそれだが、識語部分を読めば、この図は主要都市を図内で示すことが目的とされていることが分かる。幸安の中で、両図はその役割が明確に分けられていた。

「日本分野図」と内容が類似するのは、むしろ前掲の「地球天合線度図」である。「地球天合線度図」の識語によれば、この図は

日本と唐土との正線、および朝鮮琉球等の極度を知らしむ

目的で作られた。そして、「日本分野図」と同じく暖帯や正帯などについての説明も添えられている。この両図に見える風土の理解は、幸安のオリジナルではなく、西川如見の『日本水土考』を引用したものである。幸安は、京都地誌の作成に当たっても、既存地誌の引用を中心に構成しており、その内容を詳細に地図化したところに幸安の独自性があった<sup>41)</sup>。ここでも、如見の知見を新たな地図のなかで表現した点に幸安の「図書」に関する姿勢を読み取ることができる。

作製時期もふまえて両図の関係を考えれば、東アジアの風土を緯度によって説明した「地球天合線度図」の発想をふまえて、日本というより小範囲のなかでそれを示そうとしたのが「日本分野図」であったことになる。経緯線を表現する発想も基本的には「地球天合線度図」から得たと思われる。海野は、同じく幸安が残しているポルトラノ図（「大地世界三大界五大洲之裏 北極亜細亞洲南極墨瓦臘泥加洲 渾円天度合体図」国立公文書館蔵、宝暦2年）からの影響を指摘しており<sup>42)</sup>、作製年の順番からすれば、確かにその可能性もあるが、表現内容と識語から判断すれば、「地球天合線度図」の方がより直接的な関係性があると見てよい。

#### IV. 日本の地図史における幸安の位置づけ

IIで検討したように、幸安の「日本分野図」は、粗略ながらもその模写図が赤水に伝わっていたことが、改めて確認された。ただし、赤水の「日本分野図」への依拠の度合いは、海野が主張しているほど、大きなものとは言えないことも確認された。端的に言えば、幸安から赤水に「橘守国図」を通して伝わったのは、「経緯線を表現した日本図という発想」ということに集約できるだろう。この点において、地図史、とりわけ日本図の作製史における、幸安の貢献を改めて評価することは可能であり、またそのような作業が必要である。

また、当時の文化全体から見ても、両者の関係は非常に興味深い。18世紀、知識人たちの中に「正しく」、「詳細な」知識を求める博物文化が展開した。とりわけ、それは視覚的な正しさ・詳細さであり、それを証明する（可視的な）モノが作成・収集されていった<sup>43)</sup>。このような背景を考えたとき、幸安の経緯線の挿入、そして赤水への伝播という営為は、地図史の動向が同時代の他の文化的営為と軌を一にしていたことを示す典型と言える。

ただし、Ⅲで論じたように、「日本分野図」のみを取り出して評価することが、幸安の意図を適切にくみ取ったものとはならない点にも十分な注意が必要である。少なくとも寛延4年以降の幸安にとって、地図作製は自らの「日本志」構想の一部に位置づけられるものであった。440枚もの地図のなかで「日本分野図」だけが特別であったわけではないのである。

幸安の「日本志」は、①視点を時空間軸で移動させながら体系的に日本を描出させる手法、②図と書(志)による表現、③組織ではなく幸安個人による構想および作成/作製、といった点に特徴がある<sup>44)</sup>。たとえば、日本を視野に入れた地図作製事業でいえば、江戸幕府の国絵図事業に類例を見出せるが、国絵図は統一的な視点で日本をとらえるものであり、多様な視点で日本をとらえようとした「日本志」とは異なる点が多い。また、地誌作成については、『五畿内志』など江戸時代を通じていくつかの試みがなされたが、全国規模の事業で完成したものはなかったといっ  
てよい<sup>45)</sup>。幸安も、当初は地誌による全国把握を志していたが、それは実現せず、その点では他の事業と同じである。ただ、「図書」という形式の採用によって、簡略ながらも各地の志を網羅することに成功した<sup>46)</sup>。

このように地図・地誌いずれの側面から見ても、幸安の「図書」形式による「日本志」はきわめて独創的な事業であると評価できる。そして、ここで取り上げた日本図に焦点を当てるならば、「日本志」の成果の一部である日本図を受け継ぎ、さらに独自の知識を交えつつ完成されたのが赤水日本図であった、ということになるだろう。

もちろん、小稿は「日本志」のうち、日本図のみを取り上げて論じたものであり、その全体像を解明するには検討が不十分である。そのため、「日本志」という事績の意義を早急に結論づけることは差し控えたい。しかし

ながら、地図史において、幸安の事績は、単に個別の地図の内容のみで評価されるべきものではなく、「日本志」という全体像を通じて評価していくべきであることを確認できたかと思う。小稿で得た見通しについて、より議論を深めていくことが必要であることを今後の課題と設定し、ひとまず稿を閉じることにしたい。

(京都府立大学文学部)

#### 〔付記〕

本稿の研究に当たっては、平成21年度国土地理協会学術研究助成金の一部を活用した。また、第52回歴史地理学会、第14回国際歴史地理学会にて、本稿の一部をそれぞれ発表した。最後に、図版掲載の許可をいただいた京都大学附属図書館・高萩市歴史民俗資料館・独立行政法人国立公文書館に感謝申し上げる。

#### 〔注〕

- 1) 矢守一彦『古地図と風景』、筑摩書房、1984、316頁。
- 2) 全体像をつかもうとする検討としては、唯一柴田の議論があったが、使用する資料の検討範囲が限定的であった。柴田勅夫「森幸安とその著作」、日本地図資料協会編『古地図研究附古地図集 月刊古地図研究百号記念論集』、国際地学協会、1978、89～133頁。
- 3) 辻垣晃一・森 洋久『森幸安の描いた地図』、国際日本文化研究センター、2003。
- 4) 辻垣晃一「森幸安の地図を追って 一函館市中央図書館と国立国会図書館における調査報告一」、日本研究32、2006、317～331頁。
- 5) 上杉和央「地誌作成者としての森幸安」、歴史地理学47-4、2005、13～33頁。
- 6) 上杉和央「森幸安の地誌と京都歴史地図」(金田章裕編『平安京-京都 都市図と都市構造』、京都大学学術出版会、2007)、99～121頁。
- 7) 上杉和央「18世紀における地図収集のネットワークー大坂天満宮祝部渡辺吉賢を中心

- に一」, 地理学評論80-13, 2007, 823~841頁。
- 8) 幸安作製の日本図の緯線に直行する直線が実質的に経線を意味していたことは、既に海野(うんの)が、図内の「其ノ東極ヨリ西極に至ル径度十二ニ相亘ル」という説明を引用しつつ、明らかにしているが、別の資料で若干の補足しておきたい。日本図よりも前に幸安が作製した「日本志輿地部 地球天合線度図」(国立公文書館蔵)では、南北線が時間差を示すことを説明しており、日本図作製以前の幸安に経度についての理解があったことは明らかである。この点をふまえ、本論では幸安作製の日本図に見える方格状の線について「経緯線」と表現しておく。ただ、海野も指摘するように、作図に投影法は利用されておらず、現代の経線概念と同一ではない。この点、留意願いたい。なお、長久保赤水の日本図における南北線の表現についても、海野が類似した指摘を行い「実質的には経線」と論じている。
- ①うんのかずたか「江戸時代の本初子午線」(『ちずのしわ』, 雄松堂出版, 2005), 324~332頁(初出, 月刊古地図研究14-11, 1984)。②海野一隆「藤原貞幹の日本図の原拠」(『東洋地理学史研究 日本篇』, 清文堂出版, 2005), 510頁(初出, 古地図研究311, 2003)。
- 9) 海野一隆「近世刊行の日本図」(海野一隆・織田武雄・室賀信夫編『新装版 日本古地図大成』, 講談社, 1974), 26~30頁(初出は『日本古地図大成』, 講談社, 1972)。および前掲8)。
- 10) 馬場 章「地図の書誌学 一長久保赤水『改正日本輿地路程全図』の場合一」(黒田日出男ほか編『地図と絵図の政治文化史』, 東京大学出版会, 2001), 383~430頁。
- 11) たとえば、上杉和央「日本図の出版」, 京都大学大学院文学研究科地理学教室・京都大学総合博物館編『地図出版の四百年—京都・日本・世界—』, ナカニシヤ出版, 2007, 33~67頁。
- 12) 秋岡武次郎『日本地図史』, 河出書房, 1955 (ミュージアム図書より新版:1997)。
- 13) 文化財指定を受けた資料の一覧が下記に掲載されている。高萩市文化協会『ゆずりは』11, 高萩市文化協会, 2006。
- 14) 前掲9) 29頁。
- 15) 前掲8) 512頁。
- 16) 前掲9)。
- 17) 前掲9) 29頁。
- 18) 室賀信夫『古地図抄』, 東海大学出版会, 1983, 156頁(初出, 地理13-1, 1968)。
- 19) 矢守一彦『古地図と風景』, 筑摩書房, 1984, 153頁。
- 20) 高萩市教育委員会(高萩市歴史民俗資料館)の豊田智美氏よりご教示を得た。
- 21) 長久保光明・海野一隆「改正日本輿地路程全図」, 海野一隆・織田武雄・室賀信夫編『新装版 日本古地図大成』, 講談社, 1974, 60頁(初出は『日本古地図大成』, 講談社, 1972)。
- 22) 長久保光明『地図史通論—談義と論評—』, 暁印書館, 1992。
- 23) 川合英夫『黒潮遭遇と認知の歴史』, 京都大学出版会, 1997, 144~148頁。
- 24) 前掲3) および7)。
- 25) 長久保片雲『地政学者 長久保赤水』, 暁印書館, 1978。および前掲22)。
- 26) 有坂道子「木村兼葭堂と地図」(藤井譲治・杉山正明・金田章裕編『大地の肖像—絵図・地図が語る世界—』, 京都大学学術出版会, 2007), 388~409頁。
- 27) 「伊豆国属島地図」の識語より。
- 28) 前掲7)。
- 29) 前掲3) および4)。
- 30) 前掲1) 314頁。
- 31) 『増修改正撰州大坂地図』(1806刊行) 内序文
- 32) 前掲3)。
- 33) 京都に関する推定考証図については、以前に検討を行ったことがある。前掲6)。
- 34) 前掲6)。
- 35) 「摂陽神廟図」(1749) 神戸市立博物館蔵。なお、引用文については書き下して表記する。
- 36) 前掲35)。
- 37) 前掲3)。



- 38) 「日本尚古図」・「日本志輿地部 分国之図」・「日本分土図」（いずれも国立公文書館蔵）による。日本輿地図は並河誠所から久保重宣、宇野宗明、渡辺吉賢、森幸安という順に伝わった。これらの交友関係については、拙稿を参照のこと。前掲7)。
- 39) ただし、「日本分土図」には、渡辺氏から大小二図を借りたのは寛延4年8月からと記され、若干食い違いを見せる。この理由は不明であるが、あるいは「日本分土図」の清書が宝暦5年であることに起因する可能性もあるだろう。
- 40) なお、辻垣らは「日本分界図」を「日本志輿地部 日本分野図」に、「日本輿地図」を「日本志輿地部 日本水土図」に比定している（前掲3）。しかし、「日本分野図」は橘守国図をもとに、「日本水土図」は『日本分形図』をもとに、それぞれ宝暦4年に作られたものであり、年代的に疑問が残る。
- 41) 前掲6)。
- 42) 海野一隆「日本分野図」（海野一隆・織田武雄・室賀信夫編『新装版 日本古地図大成』、講談社、1974）、58頁。
- 43) 上杉和央「博物学と地図収集ネットワーク」、京都府立大学学術報告（人文・社会）60、2008、41～68頁。
- 44) 前掲3) 5) および6)。
- 45) 享保5年（1720）から宝暦3年（1753）まで行われた全国的な政策としての薬草見分、丹羽正伯の諸国産物帳作成、また平瀬徹斎による『日本山海名物図会』（1754刊）など、本草や物産という観点に特化した事業には全国的な事業が見られた。しかし『五畿内志』のような本格的な地誌という点では、全国的な事業は貫徹しなかった。なお、本草の関心の高まりと地図との関連については、別稿で触れる予定である。上杉和央『江戸知識人と地図』、京都大学学術出版会、印刷中。
- 46) たとえば、橋本宗吉作・長久保赤水閣による『和蘭新訳地球全図』（1796刊）のように、地図の周囲に文字情報が豊富に記載される形式は、幸安以後にも作製されている。そこに幸安の「図書」形式の影響があるかどうかについての調査は、今後の課題としたい。